

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 92 号 令和元年(2019) 7月 20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



ボウリング発祥の地 の碑 (中央区)

ボウリング 一五〇年

東遊園地の西側に丸いモニュメントがあります。これは神戸の「ボウリング発祥の地」記念碑です。黒みかげ石でボウルを模し、右側には大理石で作られた白いピンが付いています。この碑は、一九八九年のボウリング発祥一二〇周年と神戸市政百周年を記念し建てられました。

開港後の神戸では、居留地の外国人によって「クラブ・ユニオン」や「インターナショナル・クラブ」といった社交クラブが誕生しました。クラブハウスには、食堂、バー、カードルーム(ブリッジルーム)、図書室、ビリヤード場、そしてボウリング・レーンがありました。この社交クラブで行われたのが、神戸におけるボウリングの発祥です。当時、ボウリングは、娯楽としておおいに楽しまれていたようです。

神戸でボウリングが行われて一五〇年、親しまれてきた歴史がこの碑には刻まれています。

参考文献 『外国人居留地と神戸』
『Geschichte des Club Concordia』 「ハロルド・S・ウィリアムズ著神戸外国倶楽部1975年」 『居留地の窓から 神戸外国人居留地研究会年報6号』 ほか

神戸市史紀要「神戸の歴史」第二十七号 神戸市（文書館）編集・発行

市史紀要の最新号である。今号では初代兵庫県知事・伊藤博文と神戸との関わり、大倉山公園に建てられた銅像・台座、また二度にわたり大倉山公園に建設が計画された神戸市公会堂について、新たな発見や研究の成果がまとめられている。

伊藤の神戸での実績だけでなく、政治理念の形成過程に注目。銅像建設に至る経緯を、大倉山の呼称や公園整備等の背景も含めて詳述する。幻となった公会堂については、設計計画と設計競技（コンペ）に関して詳細に検証されており、貴重な図版が多数収録されている。

阪神・淡路島「高低差」地形散歩―凹凸を楽しむ 新之介（洋泉社）

大阪の地形の変化を楽しむ学ぶ「大阪高低差学会」の代表である新之介さん。本書では、阪神間から神戸、明石、淡路島にわたる十五エリアを取り上げ、地形と歴史に着目した町歩きを紹介する。

六甲の麓から一直線に海が見通せる坂道、断層をまたぐ新神戸駅、有馬の湯とプレートの謎、淡路の沼島にある世界でも希少な靴型褶曲など、地形やその成り立ちを知ると、同じ場所でも違った興味がわき楽しみが増える。3D地形図や著書撮影の写真も多数掲載。

KOBE 近代港湾荷役の地 弁天浜・国産波止場 村上和子編集・執筆（波止場町通まちづくり協議会）

神戸港開港一五〇周年を記念して刊行された。開港から現在に至るまでの神戸港発展の歴史を豊富な写真、絵図で時代順に振り返る。

特に、荷役のコンテナ化以前の神戸港を支えた仲仕と呼ばれる港湾労働者や舢艀の活躍、彼らの仕事と生活の様子が、その舞台であった弁天浜、国産波止場と共に詳しく紹介され、往時の賑わいが蘇る。

次の本へV3しごと編 神戸新聞「次の本へ」取材班（苦楽堂）

「本はいろいろあるから面白い」を合言葉に、神戸新聞の取材班が七十一人にインタビュー。一人につき二冊の本を紹介した連載記事の書籍化である。

シリーズの三作目となる本著は、「仕事をする人」から話を聞く。画家や作家、マジシャンなど登場する仕事の幅は広い。人々の本との出会いや選書理由から、人柄や生き方が伝わる。紹介された本の情報も掲載され、気になった本について調べられる。

小林一三―日本が生んだ偉大なる経営イノベーター 鹿島茂（中央公論新社）

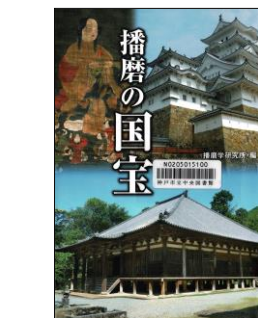
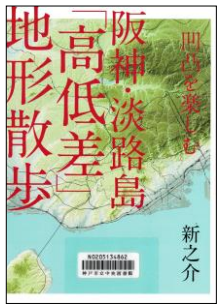
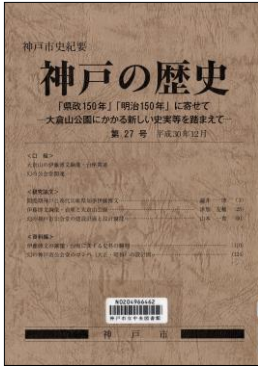
阪急電鉄や百貨店、宝塚歌劇団などの創設で知られる、近代日本を代表する経営者の評伝である。人の少ない土地へ鉄道を敷設し、沿線を住宅地として開発しようとする発想に至ったのはなぜだったのか。女性のみで演じる歌劇団がターゲットとした客層は誰であったか、そしてその狙いとは。

数々の小林の業績を、人口学というキーワードで再検討する。

播磨の国宝 播磨学研究所編（神戸新聞総合出版センター）

本書は、播磨にある多くの国宝、重要文化財に焦点を当てた複数の特別講座をまとめたものである。世界遺産である姫路城や鶴林寺、一乗寺の建築や収蔵資料が、播磨の歴史のみならず日本史を物語るうえでも貴重であることが説明されている。

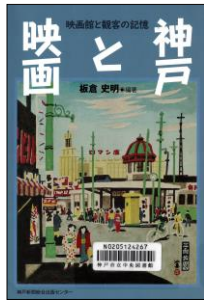
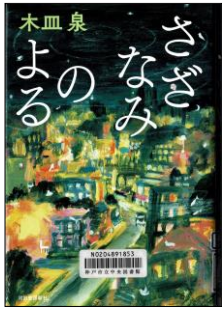
神戸市西区の太山寺をテーマにした講座では、鎌倉幕府討伐を知らずで貴重な重要文化財「大塔宮護良親王令旨」などを基に、歴史の表舞台へと躍り出た太山寺の活躍や、比叡山焼き討ち後に、数奇な運命を辿った太山寺の経典などについて詳しく述べられている。



神戸と映画—映画館と観客の記憶
板倉史明編著（神戸新聞総合出版センター）

明治以来、人びとは映画という新しい娯楽をどんな風に楽しんだのか。新開地や三宮に建てられた数多くの映画館は神戸の歴史や街の変遷にどのような関わりがあったのか。十一人の筆者による論考と、編者のコラムで分析した。

明治二十九年の日本初のキネトスコープ上映、映画と新聞広告、昭和初期のトーキー反対争議、戦後占領期の興行、戦後の自主上映運動や特撮ファン活動の紹介など、論点は幅広い。丹念な資料調査に基づく内容は、読者に更なる興味を呼び起こすだろう。



さざなみのよる 木皿泉（河出書房新社）

市内在住の夫婦脚本家、木皿泉によるドラマ「富士ファミリー」のスピノフ外伝小説である。

物語は、主人公の小国ナスミが癌で亡くなるところから始まる。

享年四十三歳。ナスミの死は、姉妹や夫、同級生、かつての同僚など、彼女が生前に出会った人々に少しずつ影響を与えていく。それぞれの目線から語られた十四話が収録され、「死」をテーマにしながらも、一話読むごとにどこか心が温まる。

ひょうご雑学100選—五国の魅力
先崎仁（神戸新聞総合出版センター）

兵庫県は日本海と瀬戸内海に接し、地域によって気候や風土、方言などが異なり多彩な面を持つ。「兵庫県は、どうして日本の縮図なのか?」「日本一低い分水界がある?」「日本初の鉄道トンネルは、神戸市の石屋川トンネル?」など、兵庫県に触れることができる百の雑学を、自然や地場産業、歴史、食など九つの章に分けて紹介している。

II その他の新刊 II

神戸市教育史 第四集（神戸市教育史第四集刊行委員会）

お好み焼きの物語 近代食文化研究会（新紀元社）

神戸平和マップ—私たちの街にも戦争があった（神戸平和マップをつくる会）

食からひろがる地域のつながり—まわりの日々 入江一恵（フェミックス）

神戸 その16
あんな人こんな人

三宅 廉 みやけ・れん

明治36年(1903) ~ 平成6年(1994)

三宅廉は明治36年（1903）10月、熱心なクリスチャンである三宅幸平・ふさ夫妻の三男として神戸市中央区に生まれ、兄弟とともに聖書に親しんで育ちました。15歳の時に父が急逝し、命の儚さ^{はかな}に衝撃を受けますが、信仰を支えに兄弟で助け合い、医学の道を志します。

小児科医となった三宅は経験を積むうち、当時産婦人科と小児科の狭間で見落とされていた新生児に関心を抱くようになります。自らが勤務する大学病院で産婦人科医に出産時の立会いを希望しますが拒絶されました。

派閥意識の強い大学病院では新生児の診療は難しいと知った三宅は大学病院を辞め、神戸に「パルモア病院」を開設します。産婦人科医と小児科医が協力して妊娠後期から出産後まで一貫してケアする全国初の「周産期病院」です。

三宅廉が切り開いた周産期医療はやがて全国に広がり、日本は世界で最も新生児への医療とケアの行き届いた国の一つとなったのです。

参考文献『パルモア病院日記—三宅廉と二万人の赤ん坊たち』
中平邦彦（新潮社 1986）



ランダム・ウォーク・

イン・コウベ ⑨
『万葉集』敏馬神社と海の歌

阪神電鉄岩屋駅の南東に敏馬神社があります。鳥居をくぐり急な石段を上ると拝殿があり、市街地の喧騒を忘れてしまうほど落ち着いた雰囲気。境内が参拝者を迎えてくれます。

敏馬神社の縁起は古く、神功皇后が新羅出兵の時、美奴売山の神が「我が山の杉で船を作るように」と教え、皇后がその通りにしたところ大成功をおさめたため、帰還の際、神をここに祀ったといわれています。平安時代の『延喜式』には、生田神社、長田神社とならんで記され、市内最古の神社の一つです。

境内には二つの万葉歌碑があり、その一つが柿本人麻呂の歌です。

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の

野島の崎に船近付きぬ

巻3-250



敏馬神社
境内の万葉歌碑

西方の任地へ向かう船で、難波の港から敏馬を過ぎ、淡路島の野島に

向かっています。敏馬から野島までは海路を行く人に難所として恐れられた明石海峡を通らなければならず、明石海峡を過ぎると大和の山々はどう望めません。この歌には、敏馬という土地への讚美と祈りの描写とともに、故郷を離れる旅びとの旅愁がこめられています。

妹と来し 敏馬の崎を 帰るさに
ひとりし見れば 涙ぐましも
行くさには 二人我が見しこの崎を
ひとり過ぐれば 心悲しも

巻3-449・450

この二首は大伴旅人の歌です。大宰府の長官だった旅人は大納言に任せられ大和に戻ることになりました。数年前、大宰府に向かった時には連れだつて一緒にいた妻を任地で亡くし、独りで帰る歌にはその寂寥が漂っています。



「上代難波崎務古水門附近想像図」
船は海岸に停泊しながら航行しました。敏馬は重要な寄港地でした。
出典：『万葉地理研究 兵庫篇』

海を詠んだ歌は他にもあります。

天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば
明石の門より大和島見ゆ

巻3-255

人麻呂のこの歌には、望郷の思いを抱き続けて明石海峡を越え、眼前の風景への懐かしさが感じられます。

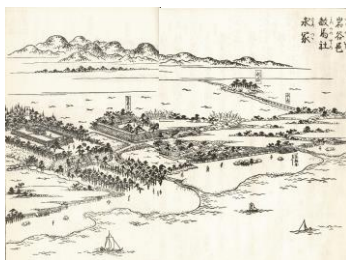
海神は 奇しきものか 淡路島
中に立て置きて 白波を 伊予に
廻ほし 座待月 明石の門ゆは
夕されば 潮を満たしめ 明け
されば 潮を干れしむ 潮さるの
波を恐み 淡路島 磯隠り居て
いつしかも この夜の明けむと
さもらふに 眼の寝かてねば
滝の上の 浅野の雉 明けぬとし
立ち騒ぐらし いざ子ども あへ
て漕ぎ出む にはも静けし

巻3-388

これは淡路島で明石海峡の潮待ちをする様子を詠んだ歌です。旅びとは、潮流を海神の霊力によるものと考え、磯に隠れ、眠れない夜を過ごします。雉が夜明けを告げ、旅びとは、さあ船を出そうと呼びかけます。海上で白々と夜が明けていく、光の様子まで感じさせるような美しい情景を持つた歌です。

大阪湾に臨む神戸の海の風景を見てきましたが、『万葉集』には、菟原処女伝説、真野、須磨、有馬など、神戸が詠まれた歌がまだまだあります。令和という元号になり、身近になった『万葉集』をもうしばらく探ってみたいところです。

ところで、神社名の「敏馬」はミヌメと読みますが、地元の子にはミルメと読む人も多くいます。敏という漢字は呉音で「ミン」、馬は「メ」です。ミンメがミルメとなったのは、播磨（ハンマ）がハリマ、敦賀（トウング）がツルガとなったように、古代では発音上や文字の使用上の慣習があつたためだろうと推察されています。



江戸時代の敏馬神社から求塚までの風景。鳥居の前が海岸であった様子。
出典：『摂津名所図会』

参考文献 『万葉集 新編日本古典学全集』
『万葉の歌 人と風土 兵庫 兵庫 神野富一』
『神戸の歴史 研究編』落合重信
「敏馬神社パンフレット」



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。